

レミは生きている

平野威馬雄

絵 鈴木義治



レミは生きている

平野威馬雄

絵 鈴木義治



913

ひらの いまお
平野威馬雄

レミは生きている

講談社 1977

220p. 22cm (児童文学創作シリーズ)

レミは生きている

昭和52年1月24日 第1刷発行

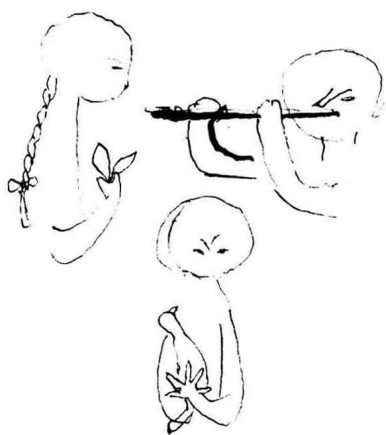
著者 ひらの いまお 平野威馬雄
発行者 野間省一
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112
電話 東京 (03) 945-1111 (大代表)
振替 東京8-3930
印刷所 廣済堂印刷株式会社
製本所 藤沢製本株式会社

©平野威馬雄 1959 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

定価は箱に表示してあります。 (児一)

ま
え
が
き



ASUKE

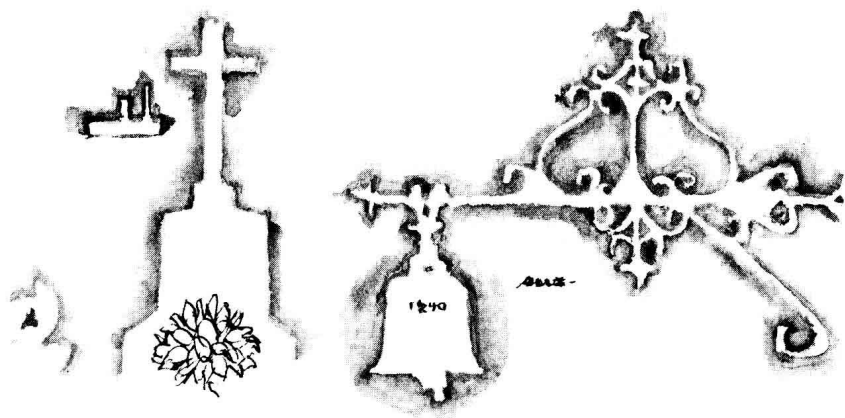
日本の少女少女に、ほんとうのことをわかってもらいたいと思って、この本をかきました。

おなじ人間として生まれながら、顔かたちかわっているというだけで、差別あつかいされ、毎日、悲しい思いでくらしている「混血児」にかわって、ぼくは、この本をかいてみました。

ぼくも混血児です。でも、ぼくなんか、まだまだ幸福でした。

ところが、戦争に負けた日本がおしつけられた「あいのこ」たちは、たとえどんなに、うわべは楽しそうでも、ほんとうは幸福ではありません。

おとなのひとにうったえるだけではだめだと思ったので、こんどは、少女少女のみなさんに、ちょくせつ、よびかけてみたかったです。

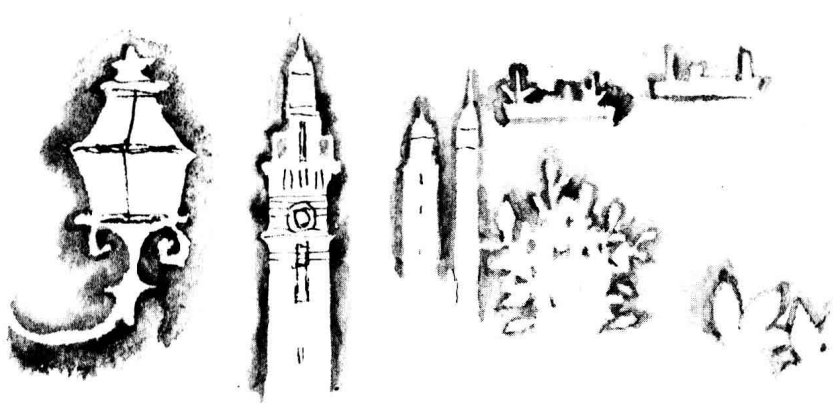


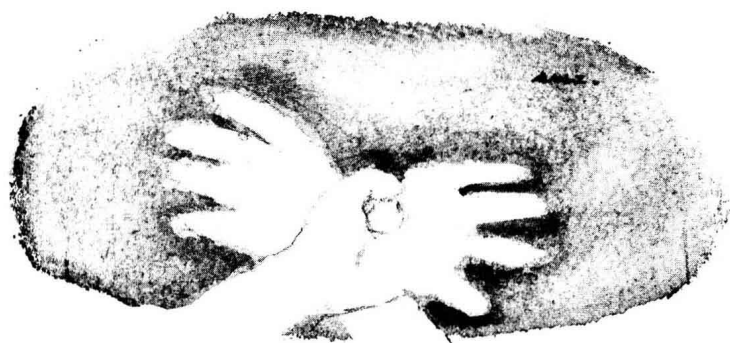
この本は、ぼくのおさないころからの、ほんとうの話です。

ずいぶん弱虫なやつだ……と思うかたもいるでしょうが、どうにもしようがなかったのです。そのわけも、この本に、くわしく、かいておきました。

どうか、みなさん、かたすみにわすれさられようとしてゐる混血児たちの、やさしいお友だちになってあげてください。そういうお友だちが、ひとりでも多くふえることが、いちばんうれしいことなのです。いつまでも、日本が、平和なよい国であるために。

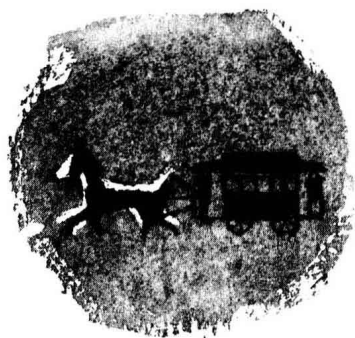
平野威馬雄
ひらの いまお





目次

まえがき……………	一
こわい物売り……………	九
おさないころの月日はこうして流れた……………	一四
ちよんきな屋のレミちゃん……………	二六
悲しいくせ……………	三三
あいのご道場……………	四〇
ばかおどり……………	四六
父の帰国……………	五三
格子なき牢獄……………	六〇
同類ものがたり……………	六七
悲しい学芸会……………	七四
おそるべき子どもになるまで……………	八二
軍人出現……………	九〇



学校を追いだされて.....	二三
土俵場のけんか.....	二三
横を向く女の子.....	三四
文学少年行.....	三五
父帰る——前夜のこと.....	四〇
シューベルトがよんでいる.....	四三
くりくりぼうずになった話.....	四六
母の誤解.....	四七
父の死.....	五九
母の死.....	六三
戦争が始まった.....	六九
日本が負けた日から.....	七〇
レミは生きている.....	七六
あとがき.....	七八

レミは生きている



こわい物売り^{ものう}

ぼくがまだ小学校にあがるまえ、横浜^{よこはま}には、こわい「物売り^{ものう}」がいた。中国の人買い船から、いけない子を買ってくるのだという。人買いは、

「いたずらものは、いないかなあ……」

といって、町をふれ歩く。

夏の昼^{ひる}、やけるように暑い日など、庭^{にわ}の木かげにハンモックをつつて、うつらうつらとねむっていると、下町のほうから、この声^{こゑ}が、まのびした、ぞうつとするような節^{ふし}をつけて、きこえてくる。

ぼくは、とうとう、そのおそろしい人買いのすがたを見ずじまったが、なんでも、おとなのひとの話では、髪^{かみ}の毛^けを、長く、まるで、へびみたいにあって、うしろにたらしめた中国人で、せなかに大きなふくろをしょっていたという。

「そのふくろの中に、いたずらものが買われて、おしこめられているんだよ。」



と、おとなのひとは教えてくれた。

大きくなってわかったのだが、この「いたずらもの」というのは、家の中をあばれまわるねずみのことで、その物売りは、島根県の石見銀山ねずみとり（つまり、ねこいらず）を売ってあるく、薬の行商人だった。

横浜には、いろいろな国の人が、むかしから、おおぜいきて住んでいた。だから、わりあいには、外国人にたいして、よそよそしくなかったし、べつに、外国人をけぎらいすることもなかった。だが、それは、ほんとうの外国人にたいしてだけだった。外国人と日本人の間に生まれた、いわゆる混血児にたいしては、なぜか冷たかった。

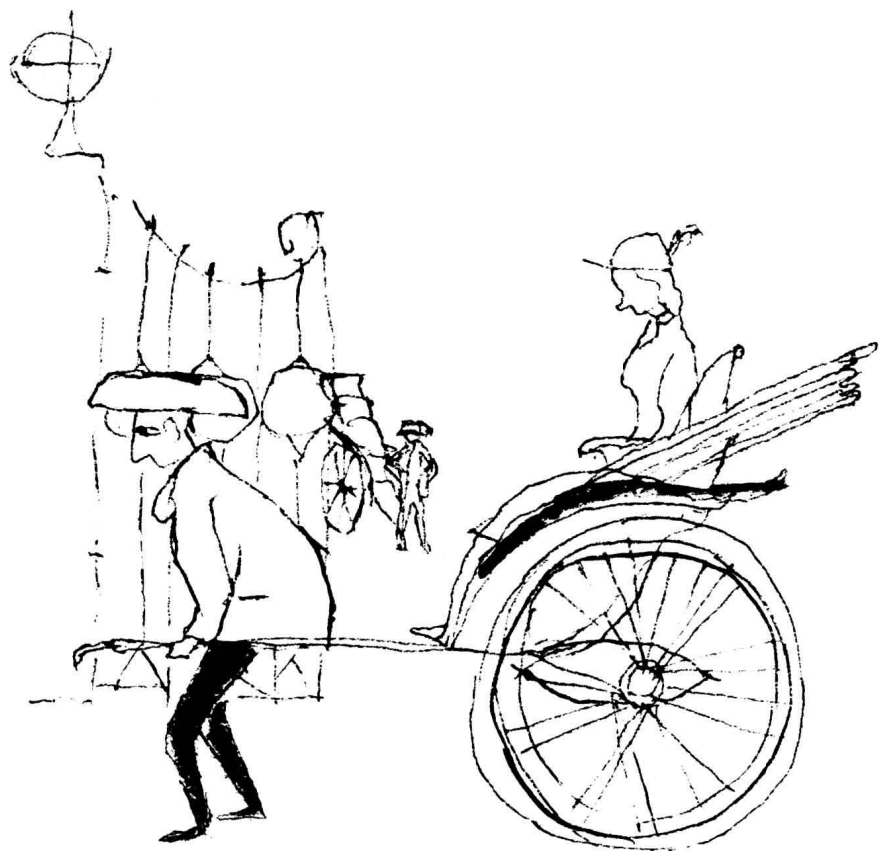
中国人でも、アメリカ人でも、フランス人でもない。むろん日本人でもない……。へんな顔をしたあいのこ人というのが、横浜にはたくさんいて、西洋人そっくりの顔なのに、英語ひとつしゃべれない。日本語ならうまいものだった。

ばくはよくおぼえているが、いまの横浜桜木町駅を横浜ステーション（ステーションのこと）といい、いまの汐留貨物駅が、東京でただひとつの、汽車のとまる新橋駅だったころのことだ。

新橋の橋のそばに、いまでもあるてんぶら屋の橋善という店が、なわのれんで、居酒屋みたいにだれでもはいれる店だった。ごはんのじぶんになると、労働者や職人がおおぜい食べにきて、まるで、浅草の食べ物屋みたいにくんざつしていた。

銀座通りには、二頭立てのうまにひかれた箱馬車が、鈴の音をひびかせて、レールの上を走っていた。鉄道馬車というのだが、はばのせまい銀座通りをのろろと走って、浅草の雷門までの往復が十銭だった。

sur-



日本橋が木の橋で、室町の三越では、和服を着た店員が、たたみの上で商売していた。

ずいぶんむかしの話だ。明治三十年ごろだと思う。汽車が新橋と横浜をいつたりきたりするだけで、片道が十六銭だった。

さて、そのころ、横浜の本町通りから、海岸通り、メリケンとは場から、イギリス領事館のあたりいったいに、毎日ふうがわりな光景が見られた。

顔かたちのかわった、西洋人らしい青年が、日本人の車屋さんにまじって、腹がけはんでんすがたで、人力車をひっぱりながら、

「だんな、帰り車でございます。乗ってください。お安くまいります。」と、通行人によびかけているのだ。

まっ白な顔に、よく見ると、そばすがいっぱいあり、見あげるほどにせいの高い青年で、髪の毛はまっかだ。そして、目の色ときたら、港の水より、もっと青いのだ。

「ああ、これが、横浜名物の『あいのこ』というものだな。」と、お客は好奇心で乗ってやる。

「りっぱな異人さんなのに、英語が話せないなんて、ふしぎだな。」と、お客は思う。

この、ふしぎな異人さんは、日本人の車夫から、はいせきされ、なかまはずれにされている。

「半毛唐（半分西洋人で、半分日本人のこと）なんかに、お客をとられてたまるものか。」と、いじわるをするのである。

それから、もうひとつ、こんな風景もあった。

「まじり（あいのこのこと）のくせに、なまいきだぞ！」

とは場人足たちが、ひとりのあいのこをかこんで、どなっている。なかには、おもしろがって、たけの棒でつついているものもある。

まじりとののしられた青年は、くやしそうに、なみだをかくしながら、直立不動だった。

「あいのこのくせに、おれたち沖人夫のなかまにはいろうとしても、だめだぞ。」

ののしられ、たたかれながらも、青年は、あぶなっかしいどんどん橋を、こしもふらふら、やけに大きな荷物をかついで、本船から岸壁へと渡ってくる。なみだで、ほおがひつれていいる。

日清・日露の二度の大勝利で、すっかり心おこった日本人の目に、外国人が、日本の女性に生ませていった毛色のかわった子どもなど、けがらわしく、目ざわりだったにちがいない。

横浜には、こんな、かわいそうなあいのこが、おおぜいいた。あいのこたちは、学校にもいけず（戸籍がないから）、世の中からはじきだされ、だんだんといじけていった。不良のなかまにはいつていくものも、すくなくなかった。

だから、かれらは、日本人がこわくてたまらない。しぜん、白人にしたしもうとする。が、白人からも相手にされない。ユーラシアン、ハーフカースト、ハーフブラッドとさげすまれ、いつもひとりぼっちなのだ。そのころの混血児が、ほとんど、ぐれん隊だったり、よた者だったりするもの、思えば、むりもないといえよう。

ぼくは、こうした中で、こうしたふしぎな世界の中で、生まれたのだ。しかも、あいのこのひとりとして。

おさないころの月日は
こうして流れた

ぼくのおさない月日は、横浜で流れた。

うちは、横浜じゅうがひと目で見おろせる野毛の山のとっぺんにあった。そこからは、どんな小さな火事でも、ああ、どこの横町が燃えてるな……と、すぐわかったし、港を出たりはいたりする汽船も、手にとるように見えた。ぼくには、ああ、きょうはフランスの船がはいってきたな、ああ、きょうのは、アメリカの貨物船だな……ということまで、すぐわかった。

冬の夜など、よく、火事があった。山下清くんなら、きっと大よろこびではり絵にするにちがいないような美しい火花とほのおで、町がめらめらと燃えていくけしきは、すてきだった。

ぼくのうちは、東京なら山の手といえるところにあつて、金持ちで、人がらのいい家にとりまかれていた。つまり、高級住宅のむれの中にまじっていたわけである。みんな、礼儀正しい人たちがばかりで、ひっそりと、しずかにくらしていた。

